

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第30号 2019年4月30日 発行

目次

* 学徒出陣 75 年シンポジウム「慶應義塾と戦争」 (石田幸生・平山 勉)……………	2・3	* 新収資料紹介……………	6
* 長野県安曇野市・上原家資料の世界 (都倉武之)……………	4・5	* 主な動き……………	6
		* センター諸記録(2018年10月～2019年3月) ……	7
		* スタッフ一覧……………	8

長野県安曇野市 上原家資料調査 — 戦没した慶應義塾出身の三兄弟 —

慶應義塾福沢研究センターでは、2010年より長野県安曇野市の上原家の資料調査を開始し、今般その資料目録の1巻が完成した。

上原家資料は、長野県南安曇郡有明村(現安曇野市)に「有明医院」を開業していた医師・上原寅太郎と与志江夫妻及びその5人の子供たち(三男二女)の資料で、中心は大正末期から戦後間もない時期、1925～1945年頃の20年ほどのこの一家の足跡を示すあらゆる資料である。5人きょうだいの上から3番目で三男の良司は、1949年に刊行された戦没者遺稿集『きけわだつみのこえ』の巻頭を飾る有名な遺書を残し、昭和20年5月に陸軍の航空特攻で戦死した慶應義塾大学経済学部の学生であった。自らを「自由主義者」と自称し、日本の敗北を予言するその遺書は戦後日本の多くの人々に衝撃を与え、記憶された。さらに上の二人の兄、長男良春、次男龍男も、共に慶應義塾大学医学部を卒業し、しかも良春はビルマで昭和20年9月に戦病死、龍男は南太平洋方面で昭和18年10月に戦死した。一家はいずれも慶應義塾に学んだ男子三人を戦争で喪ったのだ。



三兄弟連名の墓碑

稀有なことはそれだけではない。この一家は、その家にあったモノをほとんど捨てることなく残してきた。それらは、戦争によって全く一変してしまうある一家の日常を残酷なほど淡々と伝えている。本調査は、地方に所在する比較的豊かな、ある無名の一家の残した遺物が、近代日本とは何であったかを検証する資料として残されることに意義を見出すものである。その量は膨大であり、調査は今後も継続される予定である。(都倉 関連記事4・5ページ)

稀有なことはそれだけではない。この一家は、その家にあったモノをほとんど捨てることなく残してきた。それらは、戦争によって全く一変してしまうある一家の日常を残酷なほど淡々と伝えている。本調査は、地方に所在する比較的豊かな、ある無名の一家の残した遺物が、近代日本とは何であったかを検証する資料として残されることに意義を見出すものである。その量は膨大であり、調査は今後も継続される予定である。(都倉 関連記事4・5ページ)

稀有なことはそれだけではない。この一家は、その家にあったモノをほとんど捨てることなく残してきた。それらは、戦争によって全く一変してしまうある一家の日常を残酷なほど淡々と伝えている。本調査は、地方に所在する比較的豊かな、ある無名の一家の残した遺物が、近代日本とは何であったかを検証する資料として残されることに意義を見出すものである。その量は膨大であり、調査は今後も継続される予定である。(都倉 関連記事4・5ページ)



(写真上) 5人のきょうだいが出征中の父に送ったユニークな写真

(写真下) 仏壇(左端)の前での資料調査

学徒出陣 75 年シンポジウム 「慶應義塾と戦争」

2013年に開始した「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトでは、2018年12月1日(土)、2日(日)の2日間、シンポジウムと研究報告会を開催した。ここでは、シンポジウムの登壇者2名の報告概要を掲げたい。

■「慶應義塾関係者への戦時下に関する 聞き取りの分析」の報告を終えて

石田 幸生

(亜細亜大学都市創造学部講師・福沢研究センター研究嘱託)

本稿では平成30年12月1日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された、学徒出陣75年シンポジウム「慶應義塾と戦争」における標題の報告内容と趣意を記す。平成25年8月から慶應義塾福沢研究センター、都倉武之准教授を中心に「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトが始動し、戦時下に義塾と関係者の状況について、聞き取りが進められてきた。聞き取り数は100件を超え、主な対象は学徒出陣などで戦争を経験された当時の塾生、家族をはじめ、多様な属性の方々であった。聞き手は都倉准教授、横山寛調査員、石田などプロジェクト調査員が担った。主な質問項目は義塾入学まで、塾生時代、軍隊時代、復員後の略歴、後世へのメッセージなどに関する内容である。調査から報告まで、塾史と多様な個人史との接点が意識された。義塾と戦争のかかわりは、学生の徴兵猶予停止が発表された昭和18年9月以後に深化する。10月に雨の神宮外苑で出陣学徒壮行会、11月に三田で塾生出陣壮行会が行なわれた。そして12月1日、学徒兵が軍隊に入ることになった。今回のシンポジウムは、当日に白井厚名誉教授が指摘されたように、この日の歴史的意味を考える目的があった。

報告では戦時下における塾史の出来事を示した上で、以下に含まれる聞き取りの具体的なシーンを動画で紹介した。日吉、三田で学んできた塾生は、12月1日、学徒兵として陸軍に入営した。その一人、土井利雄氏は陸軍東部62部隊に入り、溝ノ口の山坂で大砲搬送を繰り返した。後に兵隊を率いた時、かつて小泉信三塾長から毎月呼ばれて教わった訓示、「途に老幼婦女に遜れ」をいつも思い出した。厳しい場を離れば弱い者を助け、食べ物をもらえば皆で分けたという。一方、18年12月10日、学徒兵は海軍に入団した。その一人、岩井忠正氏は、この時から海軍の武山海兵団に入った。19年3月、日吉では予科第一校舎が海軍軍司令部、連合艦隊本部に貸与された。対潜学校を経て特攻隊を志望する状況となった岩井氏のもとに、20年1月、同じ回天特攻隊員の塚本太郎氏が会いに来たという。塚本氏が出撃する前夜のこ

とだった。「話せることは何もない。そうかと言って握手しただけです。死ななきゃならないということになると、この世の中をととても肯定したくなる。この世の中のつながりを確認したい。同じ慶應だということを確認しにきた。」20年4月に日吉地区、5月に三田・四谷地区はそれぞれ戦災に遭い、全国最大の空襲被災大学となった。玉音放送の瞬間、勤労働員を経験した阿部喜兵衛氏は言い表せない気持ちでいた。9月、日吉の施設は進駐軍によって接収される。その後、海軍飛行専修予備学生、土浦航空隊から復学したばかりの大村鎧太郎氏は、火傷を負った小泉塾長のご自宅での講義に参加したことを話した。「戦争中に焼いて、頼んでいた百科事典がちょうど着いた日で、先生はすごく喜んでおられた。『君、今日着いたのだよ』と。」戦後の険しい再出発が始まった。そして、戦争を経験した義塾へのメッセージとして鳥居泰彦元塾長が語った。社会が相当に進歩した今の時代にあって、「結論は右も左も同じで、どうやって平和を作っていくか、維持していくかを考える学校になってほしい。」

75年前、学生が戦争を知る日であった。今回の12月1日は、当時の義塾と塾生の状況を通じ、戦争によってもたらされたことを改めてよく考える日となった。戦争の記憶、モノ、データをきっかけに、個と全体の意味を考え続けることが時代に課されている。慶應義塾関係者への戦時下に関する聞き取り、個の記憶と語りの中で、義塾への愛着と畏敬の念は揺るぎない。一人一人と塾史とのつながりを感じる。語りの声は多く、先に残された課題も少なくない。シンポジウムで指摘された点を受け止め、世の中に発信する活動の一助となるよう努めたい。



シンポジウムの全体討議

■ 戦時下の塾生・塾員の動態分析

：在学証書・学籍簿・成績原簿・卒業学生要録の
データベース化を通じて

平山 勉

(湘南工科大学工学部総合文化教育センター教授)

データベースと言えば、検索機能の利便性をイメージすることが多いが、歴史研究のためのものである本データベースは、次の4点をコンセプトとして構築されている。

1. 発見性：様々なデータを組み合わせることで、新しい知見を得られる構造であること
2. 拡張性：新しい資料の発見に対応できる構造であること
3. 透明性：データベースの構築過程を確認できるようになっていること
4. 簡便性：データベースの構築や誤操作チェックなどの作業が簡略化されていること

これらを満たすことで、データベースはクリエイティブティを備えた歴史研究に資することが可能となる。

このプロジェクトで入力を進めている史料は、入学時に提出される「在学証書」、「学籍簿」、「成績原簿」、そして、卒業時に提出される「卒業学生要録」の4点である。入力対象となっているのは大学(文・経済・法・医学部)と高等部・医学専門部で、卒業年度は1940～49年度となっている。なお、退学者も含まれている。

4つの史料がもつ「項目」を見てみよう。「在学証書」には、表面に、本人氏名(フリガナ)、正保証人氏名・現住所・職業、副保証人氏名・現住所・職業、裏面に、本人氏名(フリガナ)、生年月日、原籍(戸主との関係)、原居所、居所変更、大学予科(学科)、学年・組、成績・席次、転学・退学・除名及事由(年月日)、出身中等学校(卒業年月)、予科入学試験合格年月、徴兵事故(徴集猶予年月日)、正保証人との関係などがある。「学籍簿」には、氏名、生年月日、学科・学年・組、原籍身分、子弟・戸主(華族・士族)、保証人居所氏名、入学前の学歴、入学年月日、徴兵事故、入学試験の有無(受験番号)、転学退学年月日及理由、修了卒業年月日及学科などがあり、「成績原簿」には、科目名と成績のほか、余白部分に入隊・復員年月日などが手書きされている。「卒業学生要録」はアンケート調査に準ずるもので、表面に、名、生年月日、部別科別、原籍(戸主名、続柄、育成地)、現住所(電話番号)、宿所の種別(自宅・親戚・知己・下宿・寄宿舍・其他)、学歴、正保証人(氏名・住所・職業・続柄又は間柄)、副保証人、家族の状況(続柄、氏名、年齢、職業、出身又は在校名)、学費年額概算(学費の出所)、裏面に、志望会社、健康状態、性質、涵養助長しつつある長所、反省矯正しつつある短所、素行、思想、

得意不得意の科目(卒業論文題目)、愛読書雑誌、運動(有級者、有段者)、趣味娯楽、嗜好(酒、煙草、其他)、所属各会名、交友状況、兵役関係、宗教信仰、特有の技能などがある。実にさまざまな項目をもつ4史料である。

データベースの構築としては、これら4つの史料をデジタル画像にした上で、一人ひとりまとめていくことを進めてきた。まず、「在学証書」から、①氏名、②生年月日、③原籍地(道府県)の3項目を入力して、基礎となる<名簿>を作成して、3項目を通じた名寄せによって4つの史料の画像をつなげた。①氏名、②生年月日、③原籍地(道府県)のいずれかが異なる塾生・塾員が現れた場合には、<名簿>に追加してある。その結果をまとめたのが以下の表である。「在学証書」から作成された<名簿>では17,625名の塾生・塾員を数え、残りの3史料からの情報を加えると、総数は20,724名となる。

史料別の塾生・塾員数

				(名)
在学証書	学籍簿	成績原簿	卒業学生要録	
○	○	○	○	3,073
○	○	○	×	2,068
○	○	×	○	1,620
○	○	×	×	1,198
○	×	○	○	2,002
○	×	○	×	1,427
○	×	×	○	1,763
○	×	×	×	4,474
×	○	○	○	9
×	○	○	×	438
×	○	×	○	7
×	○	×	×	1,103
×	×	○	○	7
×	×	○	×	1,521
×	×	×	○	14
17,625	9,516	10,545	8,495	20,724

注:「○」は掲載あり。「×」は掲載なし。

4つの史料を俯瞰的に把握することで、「透明性」を確保しながら塾生・塾員の動態分析の基盤を作ることができたと考えている。今後は、「簡便性」のもとで実際の人数を確定する作業などを進めつつ、入力項目の追加や新史料との接続を通じて「拡張性」と「発見性」を高めていくことになる。



長野県安曇野市・上原家資料の世界

— ある一家の日常と、戦争と、近代日本 —

都 倉 武 之

2019年3月、福沢研究センターの近代日本研究資料シリーズ10巻として『長野県安曇野市上原家資料I —戦没した慶應義塾出身の三兄弟 上原良春・龍男・良司関係資料を中心に—』を刊行した(2巻は2020年度中に刊行予定)。これは2010年以来、センター内のチームが進めた調査をまとめたもので、編者は筆者の他、亀岡敦子氏(日吉台地下語保存の会副会長)、横山寛氏(当センター調査員)の3名であるが、それ以外に吉岡拓氏(明治学院大学教養教育センター准教授)、中村陵氏(当センター調査員)も現地調査を担当したチームメンバーである。

上原家資料については、本号表紙に概略を記したとおり、長野県旧有明村在住の開業医上原寅太郎・与志江夫妻とその5人の子供たちの昭和戦前期の資料が中心である。このうち、三男良司が死の前夜に記した遺書は、戦没学徒の遺稿集として有名な『きけわだつみのこえ』(1949年刊)に掲載され、さらに学徒出陣から特攻死に至る時期の思索の跡を留める手記類は『あゝ祖国よ恋人よ』と題する遺稿集に収録されて公になっている。しかしそれ以外にも、良司についての実に膨大な資料が残されていることや、長男良春、次男龍男についても良司同様にたくさんの資料が残されていることは、ほとんど知られることは無く、注目する人も皆無であった。

少し話は遡るが、筆者は2009年に開催された慶應義塾創立150年記念の福沢諭吉展(東京国立博物館ほかで開催)において、展示の企画を担当した際、戦争期の慶應義塾に関する出陳品の一つとして、上原良司の遺書をリストに加えた。良司のすぐ下の妹である上原清子氏の全面協力を得て、全国3か所の9か月にわたる開催期間を通して実物展示を実現させることができた。その展示ケースには、常に黒山の人だかりができていた。

ただ、筆者は福沢展の会期が日を重ねる中で、良司の兄2人を切り捨てたような気持ちが募った。兄たちも慶應義塾出身であり、しかも戦没していること、彼らの日常や軍隊時代の記録も大量に現存していることは、最初に上原家を訪問したときに知ることとなった。ご遺族にとって良司の資料を見に来る訪問者への対応は、日常茶飯事のようにあったが、慶應からの来訪者である筆者に語られるのは、「兄たち」の話であり、良司だけが3人の中で特別なわけではなかった。ただ世間が関心を持つ

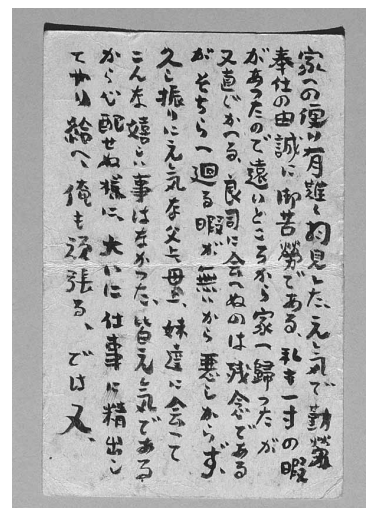
が良司だっただけである。

歴史とは得てしてこのように後世の者によって部分的に切り取られ、編まれるものではあるが、良司がことのほか完全無欠の思想家のように扱われる向きがあることにも違和感が増した。三兄弟の資料を一体に意味づけることができるのは、慶應出身という視点からではないだろうかという考えから、展覧会終了後に上原清子氏に三兄弟を区別せずに資料を目録化することをお勧めし、2010年11月に予備調査、2011年春より年に数回ずつ現地に通って、目録を取る作業を積み重ね、現在に至っている。

開始後に知ることとなったのは、残されている資料が、当初予想していた量よりも遙かに多いということである。訪問を重ねるたびに新しい驚くべき資料が発掘されてきた。それは現在進行形で続いており、本年1月にも、良司が特攻で出撃する2日前に辞世の句を記した女優(原節子?)のプロマイドが発見され、5月の調査では父寅太郎の戦中・戦後間もない時期の日記・手帳が見出された。

筆者は、この資料群が「ある一家の日常を残酷なほど淡々と伝えている」と表紙に書いた。どれほど日常としての戦争が復原できるか、次男龍男の戦死の周辺を例として示してみよう。

昭和18年7月、龍男は伊号第一八二潜水艦の軍医に配属が決定し(資料番号S-256:葉書)、出港前に帰郷が許された。7月26日、龍男は婚約者と共に帰省(寅太郎日記:番号未付与、以下「寅」)、29日午前8時付で遺書(X-28)を記し、団扇に花の絵を描いたものも残した(W-3-2)。そして翌30日に龍男は婚約者と共に故郷を出発した(寅)。当時慶應予科在学中の良司は勤労動員で座間におり兄に会えず、龍男は葉書(S-257)を出した。そして龍男は8月7日帰

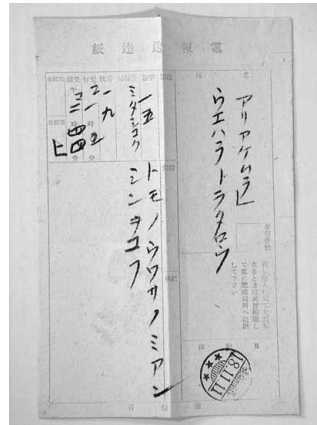


良司宛最後の龍男の葉書(S-257)

省中の御礼を佐世保から葉書(S-261)で両親に送った。

この頃の良司は手帳(Q-7)と日記(R-2)に日常をある程度記録している。陸軍軍医となっていた長男良春は、満洲から南方に転属となり、9月1日に経由地の台湾を出港(S-264:葉書)、シンガポール到着を知らせる葉書(S-265)から連絡が途絶した。

出港後の龍男からの連絡も絶え、11月10日、突如、慶應医学部の外科医局から龍男戦死に伴い履歴と写真を送るよう通知があり、学徒出陣の準備で帰省していた良司が急遽上京して医学部へ確認に行った(寅)。良司は翌11日、噂に過ぎないから安心するように父に電報(P-24-4)を打ち、家族は安心する(寅)。



良司の電報(P-24-4)

しかし夕方戦死公報(P-20、P-34)が到着。以後弔問や弔電、弔辞が続々と届く(P-24:弔問者名簿・弔電・弔辞)。11月14日、龍男の遺書(X-28)が開封され「皆泣ク」(寅)。18日に慶應医学部で行われた戦没者の合同追悼会(P-27、P-93:当日配布物)には母と志江が参列(寅)、同月20日には三田でも戦没者慰霊祭(P-90:当日配布物)が行われ龍男の名が加えられた。伊一八二潜水艦は、実は9月3日にはすでに米駆逐艦の攻撃により撃沈されていたが、それが判明したのは戦後米国側の記録が明らかになってからで、帰港予定の10月22日付をもって戦没認定されたのであった(P-6、P-65:位記・賞与辞令書)。

12月13日には早くも海軍軍医会より、龍男の遺品提供依頼状(P-35)が届き、19年3月には戦死者遺族への賜金があり、恩給も開始される(P-57)。海軍における合同葬を経て(P-85:写真)、龍男の村葬は1年後の19年11月13日に営まれ、白木の位牌に貼られていた「故海軍々医大尉上原龍男」の短冊(P-94)、遺骨代わりと思われる「故海軍軍医大尉上原龍男」の木札(P-95)も残っている。

良春にも龍男戦死の報が届いたらしく、19年3月頃と思われる葉書(S-279)に、11月15日付の良司の手紙が届いたとある。良司は18年12月1日に陸軍に入営し、別途日記や葉書を残し続けている。

龍男の戦死に関わる資料を、目録から拾ってみたのが

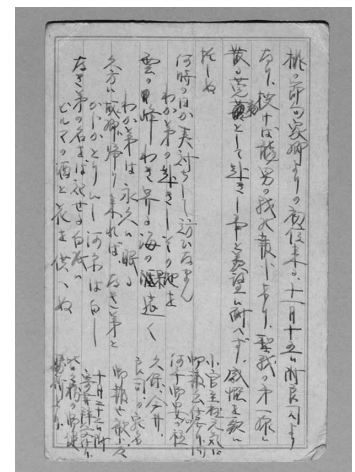
以上の状況である。これでも全てではない。昭和20年5月の良司の特攻死の周辺も詳しく情報があるが、戦況悪化に伴う戦没者の激増により龍男ほど丁寧な扱いはない。それでも特攻による死は他の戦死よりも優遇されたことは明らかである。一方で、昭和20年9月にビルマで戦病死する良春は最後の葉書(S-294、295)が20年2月頃と推定され、以後終戦を越えても音信は一切なく、役所へ問い合わせても健否不明で(O-83:3月1日付書信)、一家は長男の復員を信じたのだが、その死の報が届くのは、21年7月16日のことで(寅)、8月27日には自分が遺骨を持って帰国したという復員兵から葉書が届き(O-49)、また別の軍医も来訪して良春の辞世の句を伝える(P-43、P-65:寅太郎メモ)。

このように資料の密度が一様に濃いのが故に、資料の不存在は、遺族が知り得た情報の不存在をも伝えてくれるのである。戦時下の情報の有り様、そして彼らの死がどのように扱われたかということまで、実物資料によってありありと跡づけられるのが上原家資料の特徴である。

この資料群は戦争に翻弄され、姿を一変させてしまった、ある無名なる一家の息づかいをそっくり残している。一点一点は、歴史的に無価値と思われるものの連続であり、この目録化に意味はあるのかと立ち止まったことも何度もあった。しかし、この一家の元で残されているコンテクストを踏まえたとき、小学生の作文や落書き、受験勉強の反故紙さえもが、戦争のもたらしたものを伝え慄然とせざるを得ないのであり、その戦慄を追体験することは、無意味ではなかろう。そしてこの一家が何を語り合い、何を見て、何をしていたかを通して、近代日本の個と国家について考えることは、当センターの設立の意義に叶うものと確信する次第である。



位牌の短冊(P-94)



良春の葉書(S-279)

新収資料紹介

平成30年4月から平成31年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料のうち、福澤諭吉関係資料を紹介いたします。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

■ 久保扶桑宛福澤諭吉書簡 明治26(1893)年11月1日付 【購入】

日本郵船会社函館支店に勤務している久保扶桑より、北海道名産の鮭が送られてきたことに対し礼を述べたもの。久保は、安房館山の士族出身で、明治4年7月23日に21歳で入塾した。成績表である「慶應義塾勤惰表」には4年7月から5年8月までの記録がある。翻訳の仕事をしていたが、11年に三菱会社に入り、横浜、小樽、函館などで勤務、39年には日本鉄道会社取締役になっている。『近代日本研究』第35巻(慶應義塾福沢研究センター、2019年) pp.210～211参照。

■ 松口栄造宛福澤諭吉書簡 明治29年7月17日付 【購入】

中西美恵蔵との面会を希望し、仲介の労を依頼したもので、栄造の実父は、福沢諭吉の妻錦の父土岐太郎八の弟である。また栄造の弟季治は、教員を務めたのち三菱会社等の勤務を経て、明治30年3月日本で最初の本格的な英字新聞Japan Timesを創刊した。中西美恵蔵はその教え子で、妻は松口の娘であった。この時の面会の目的は、ジャパン・タイムズ社への協力要請であったと思われる。この書簡には「おかね」宛「きむ」書簡と一緒に保管されていたが、上記のような縁戚関係を考えると、「きむ」は福沢錦であろう。前掲『近代日本研究』第35巻 pp.211～213参照。

■ 長沼事件関係資料 2巻 【購入】

福沢諭吉は明治7年から、千葉県印旛郡長沼村(現成田市)利根川流域の沼地の入会地に起こった漁業や採藻、渡船営業権をめぐる紛争に、25年間関わり解決に尽力した。その関係資料が近年福沢研究センターに収蔵されてきているが、平成30年度も柴原和宛書簡(明治7年12月25日付)の福沢諭吉自筆下書きや小川武平宛書簡(明治8年9月20日付)などが貼りこまれた2巻を購入することができた。前掲『近代日本研究』第35巻 pp.215～218参照。

■ 福澤諭吉自筆『時事新報』漫言および雑報原稿 1巻 【購入】

明治27年7月14日付『時事新報』掲載の漫言「薬用食用都て寸伯老の医案に適したり」(『福沢諭吉全集』第14巻、岩波書店、1970年、pp.458～460)および『時事新報』掲載の雑報と考えられる「赤十字社病院長」、「下婢の自害」、「貧民の施療」のそれぞれの原稿が貼り込まれた巻子で、いずれも福沢諭吉の自筆である。但し、「貧民の施療」の最後数行は石河幹明の筆で、その旨が触れられた石河による跋文がある。雑報の掲載年月日は、それぞれ明治25,6年ごろ、明治23年10月以降、明治22年7月以降と推測されるが、現在までに正確な日付は判明していない。前掲『近代日本研究』第35巻 pp.220～226参照。

主な動き

■ 顧問・所員の活動

大阪でのセンター講座や中央区民カレッジ(29号参照)以外にも、以下にあげるような行事に顧問・所員の協力を得た。

(法)小川原教授・センター所員：大分県立歴史博物館で講演：「福沢諭吉における「独立」」(11月3日)

小室正紀名誉教授・センター顧問：中津市主催福沢諭吉記念第57回全国高等学校弁論大会審査員(12月7日)

(文)井奥教授・センター所長：第184回福澤先生誕生記念会で記念講演：「マージナルな人間としての福澤諭吉」(1月10日)

なお、センター専任所員による講演・講義は諸記録(P.7)にあるとおり。

■ ワークショップの開催

12月6日、帰国を控えた韓国梨花女子大学准教授

白玉敬氏(義塾訪問准教授)に「朝鮮時代の司訳院における日本語教育」と題する講義をお願いした。

■ 国際交流

1月から2月までの2ヶ月間、韓国延世大学の王賢鍾教授が調査のためセンターを訪れた。また、2017年8月にセンターと部局間協定を結んだ韓国啓明大学校から、同じく1月から2月までの2ヶ月間、呉允禎准教授が調査のためセンターを訪れた。さらに、1月24日から2月2日まで韓国梨花女子大学校大学院史学科から研修生3名を受入れた。

■ 『近代日本研究』の刊行

2月28日に第35巻を刊行した。特集として「学徒出陣75年」を組んだ。なお昨年12月1日～2日に開催した「慶應義塾と戦争」シンポジウム・研究報告に関連する記事は、小特集として第36巻に掲載する予定。

■ 諸会議

- *平成30年度執行委員会(10月9日、12月19日、1月22日、3月4日)
- *平成30年度第2回運営委員会(11月7日)
- *平成30年度第3回運営委員会(3月8日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集会議(10月1日、10月31日、11月21日、1月28日、3月22日)
- *平成30年度第2回福沢研究センター会議(1月23日)
- *小泉基金運営委員会(1月28日)
- *『近代日本研究』第36巻編集委員会(2月25日)

■ 人事

- 〈訪問准教授〉 吳允禎(啓明大学准教授) 1月1日～2月28日
- 〈訪問教授〉 王賢鍾(延世大学教授) 1月1日～2月28日
- 〈事務局〉 新任 平本起世美(派遣職員)
10月1日～
退職 池ヶ谷麻衣(事務嘱託)
～3月31日(期間満了)

■ 主な来住

- *NHK 大阪、小泉信三関係取材対応(10月4日、10月25日、12月26日、1月8日)
- *塾生新聞取材対応(10月5日)
- *南日本新聞取材対応(10月9日)
- *NHK、塚本太郎関係取材対応(10月15日)
- *NHK、戦没オリンピック関係取材対応(10月15日)
- *中津市教育委員会三谷紘平氏(11月6日、2月5日)、泉由貴子氏(11月6日)来訪
- *大分県立歴史博物館、資料返却(11月16日)
- *大分県立先哲史料館・福沢記念館より資料返却(11月16日)
- *大分県立先哲史料館・福沢記念館より資料返却(11月30日)
- *大阪城天守閣より資料返却(11月30日)
- *中国テンセント社取材対応(10月26日、12月25日)
- *大分 MUSE テレビ、取材対応(11月12日)
- *法政大学笹川ゼミ来訪、演説館見学及び西沢講義(『学問のすゝめ』再考)(11月26日)
- *塾員亀山保氏、陸軍中野学校関係資料寄贈(12月2日)
- *近森正名誉教授、松本浩男氏、資料閲覧のため来訪(11月14日(日吉)、12月17日)
- *大分県立先哲史料館櫻井成昭氏来訪(12月19日)
- *菊池隆志氏、寄託資料一時返却のため来訪(12月20日)
- *NHK エデュケーショナル取材対応(12月26日)
- *すみだ郷土文化資料館へ資料貸出(1月15日、2月20日)
- *福沢旧邸保存会吉田基晴氏、資料閲覧のため来訪(1月30日)
- *杉野服飾大学鈴木美和子氏他、着物調査のため来訪(2月18～19日、3月6日)
- *講談社対応(3月1日、3月27日)
- *早川書房対応(3月8日)
- *静岡県小山町溝口久氏、伊東家資料借用のため来訪(3月12日)
- *荒俣宏氏、調査のため来訪(3月15日、3月28日)
- *神奈川新聞取材対応(3月19日)
- *川越市立美術館折井貴恵氏、資料閲覧のため来訪(3月22日)
- *朝日新聞取材対応(3月25日)

■ 出張・見学

- *西沢、資料閲覧のため明治大学博物館(10月2日)
- *都倉、取材対応のため小泉妙氏宅を訪問(10月5日、3月7日)
- *竹屋、大学史資料協議会総会のため九大(10月10～12日)

- *都倉他、上原家調査のため安曇野(10月16～17日、1月28～30日)
- *都倉、横山、日吉地下壕展のため川崎市平和館(11月4日)
- *西沢、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席のため沖縄(11月7～10日)
- *都倉、釈宗演展のため京都花園大学(11月7～8日)
- *都倉、回天記念館式典出席のため周南市(11月10～11日)
- *西沢、大学史研究会のため國學院大学(11月17日)
- *西沢、資料調査のため高麗大学博物館(11月27～29日)
- *西沢、都倉、資料受贈のため木内孝氏宅を訪問(12月27日、1月18日)
- *西沢、資料調査のため米国ニューヨーク大学、ラトガース大学(3月10～14日)
- *都倉、講演、資料調査のため大阪・兵庫(3月16～17日)
- *井奥、福沢旧邸保存会理事会のため中津(3月18日)
- *井奥、西沢、新中津市学校開設検討委員会のため中津(3月18日)
- *西沢、梨花女子大学、高麗大学訪問のため韓国(3月25～27日)
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会のため中津(3月28日)

■ 講師派遣

- *西沢、ふるさと春日井研究フォーラムで講演:「林金兵衛と福沢諭吉」(10月7日)
- *西沢、大分県立先哲史料館で講演:「福沢諭吉と門下生たち—大分県出身の門下生を中心に」(10月20日)
- *西沢、福澤諭吉記念館でギャラリートーク:企画展「『学問のすゝめ』のヒミツ」展示解説(10月21日)
- *都倉、円覚寺宝物風入講演会で講演:「釈宗演と福沢諭吉」(11月3日)
- *西沢、たにしの会(東京)で講演:「『学問のすゝめ』のヒミツ—郷里中津と小幡篤次郎—」(11月3日)
- *都倉、全国議員連盟三田会で講演:「福澤諭吉と政治」(11月12日)
- *西沢、通信教育部入学説明会で講義:「福沢諭吉と慶應義塾」(12月1日)
- *都倉、「慶應義塾と戦争」シンポジウムで発表及び司会(12月1日、2日)
- *西沢、SFC 高等部学部説明会で講義:「慶應義塾の始まり—三田移転まで」(12月7日)
- *西沢、山梨アドバンスクラブで講演:「福沢諭吉の名言」(12月13日)
- *都倉、京都大学・京都大学学術出版会「京都 de 冬の大学トーク 変革期のリーダーと民衆維新のリーダー像の明と暗」で講演:「挫折者としての福澤諭吉」(12月22日)
- *都倉、姫路慶應倶楽部で講演:「小泉信三と今上天皇」(2月2日)
- *西沢、たにしの会(中津)で講演:「奥平家の資産運用—華族資産運用の一例として—」(2月2日)
- *西沢、福沢諭吉先生119回法要時記念講演会:「中津藩の明治維新一中津市学校の果たした役割—」(2月3日)

■ その他

- *新中津市学校開設準備ワーキング部会(11月6日)
- *学術資料展示施設準備委員会(12月20日)
- *塾史展示室(仮称)打ち合わせ(11月21日、12月3日、1月9日、1月24日、3月12日、3月20日)
- *竹越宛書簡を読む会(12月14日)
- *美術品管理運用委員会(12月18日)

❖ スタッフ一覧

所 長	井奥 成彦	文学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
副 所 長	平野 隆	商学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授	田中 康雄	元群馬県立文書館館長
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	戸村 理	國學院大學准教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
(兼運営委員)	岩谷 十郎	法学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	澤田 達男	理工学部教授	前坊 洋	
	武林 亨	医学部教授	松沢 弘陽	
	林 温	文学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
	山内 慶太	看護医療学部教授	宮村 治雄	
	米山 光儀	教職課程センター教授	山田 央子	青山学院大学教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授	林 宗元	韓国関東大学校名誉教授
	梅津 光弘	商学部准教授	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	大久保健晴	法学部准教授	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	Nguyen thi Hanh Thuc	Hochiminh City University of Technology Lecturer
	太田 昭子	法学部教授	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	大塚 彰	志木高等学校教諭	Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
	小川原正道	法学部教授		
	加藤 三明	幼稚舎教諭	研究嘱託	巫 碧秀
	小山 太輝	幼稚舎教諭		石井寿美世
	斎藤 秀彦	横浜初等部教諭		吉岡 拓
	末木 孝典	高等学校教諭		堀 和孝
	馬場 国博	湘南藤沢中・高教諭		山根 秋乃
	宮内 環	経済学部准教授		柄越 祥子
	Millan Martin, Alberto	経済学部専任講師		大庭 裕介
	結城 大佑	ニューヨーク学院教諭		石田 幸生
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭		重田 麻紀
	小泉 仰	名誉教授		三科 仁伸
	小室 正紀	同		横山 寛
	坂井 達朗	同		
	寺崎 修	同		
	松崎 欣一	名誉教諭	事 務 局	酒井 明夫 事務長
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授		竹屋 早月 主 務
	飯田 泰三	法政大学名誉教授		池ヶ谷麻衣 事務嘱託(～3月31日)
	區 建英	新潟国際情報大学教授		高田真規子 同
	片岡 豊	白鷗大学教授		鈴木 彩子 同(4月1日～)
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		平本起世美 派遣職員
	川崎 勝			加藤 学陽 非常勤嘱託
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		具 知會 非常勤嘱託
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授		
	曾野 洋	四天王寺大学教授	他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、8名	
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授		(4月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第30号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2019年4月30日 (年2回刊)

編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電 話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印 刷 (有)梅沢印刷所